

春の褒章・叙勲

4月28日に春の褒章、29日に春の叙勲の受章者がそれぞれ発表されました。市内の受章者を紹介します。

今回紹介した5人の他、調停委員の新谷雅子さん（矢加部、70歳）が瑞宝双光章、元日本郵便公社職員の小宮紀明さん（皿垣開、71歳）が瑞宝単光章をそれぞれ受章されています。

藍綬褒章（児童福祉功労）

強い信念で地域保育の発展に寄与



二ツ河保育園長
木下 久美子さん
二ツ河、60歳

「今年には園長になって30年の節目の年。受章は両親が一番喜んでくれるはず」と話す木下さん。父から園長のバトンを受け継ぎ、親子2代に渡って3000人以上もの卒園生を送り出してきました。

三橋村職員だった父小一郎さんが、木下酒造所の酒蔵に加えて小学校の校舎を移築し、昭和27年に設立した二ツ河保育園。母も運営に携わり、木下さんも大学卒業後の昭和60年に保育士として同園に勤務を始めました。「当時は園児が120人で経営も順調でした」と当時を振り返ります。しかし、少子化や他園の開園などで次第に園児が減少。そんな中、両親が相次いで他界し、若干29歳で園長を継ぐことになりました。「当時は私自身も2児の子育て真っ最中。寝る間もなかったです」と木下さんは目まぐるしい日々を振り返ります。そんな中でも貫いたのは「親の心で接し、体験を大事にする教育」。同園では今でも英語や絵画、茶道を積極的に導入するなど、その方針はしっかりと定着しています。最後に今後について尋ねると、「今後の保育園運営には広い視点が必要。早く次の世代にバトンを渡さないかね」と未来を見据えています。

瑞宝中綬章（行政事務功労）

官僚として長年国の行政に尽力



元近畿管区行政評価局長
堀 明彦さん
垂見、70歳

「天皇陛下からの授与は何よりうれしい」と受章を喜ぶ堀さん。33年間、霞が関を中心に全国を飛び回り、官僚として国家運営を支えてきました。

超難関の国家公務員試験を通過し、昭和54年に行政管理庁に入庁した堀さん。入庁3年目には国鉄民営化で知られる臨時行政調査会に、その10年後には第3次臨時行政改革推進審議会で技能実習制度の創設や公文書A版化などの改革の一翼を担いました。出向した国土庁では、バブル最盛期の地価高騰対策として土地取引規制などを担当。「関係省庁との調整はそりあ大変。真剣に議論を重ねたことで何とか出口を見いだせた」と振り返る言葉には力が入ります。その後は、統計企画課長として経済センサス導入に奔走。近畿管区行政評価局長時代には、組織のトップとして消えた年金記録の回復審査、行政評価や行政相談を指揮しました。「霞が関での仕事は苦しいことも多かったけど、日の丸を背負ったやりがいがあるものだった」と振り返る堀さん。「今は柳川の実家と家族がいる東京を往復するデュアルライフを楽しんでいます」と最後に笑顔で教えてくれました。

瑞宝単光章（児童福祉功労）

みんなが来たい保育園を目指して



垂見保育園長
大橋 拾子さん
垂見、79歳

「まさか自分がもらえるとは思ってなかったの、すごく感動しています」と大橋さんは受賞の喜びを話します。

結婚前は一般企業で事務員として勤めていた大橋さん。結婚を機に夫の実家の保育園を手伝うため、昭和47年に保育士に転職。そこから50年にわたり地域保育に携わってきました。「自然の中で遊ぶことで素直な気持ちを相手に伝えることができる子どもにする」という考えのもと、屋外活動を重視した方針を掲げる同園。また、40年以上前から続ける卒園文集「おもいで」は、卒園児の結婚式でもよく登場するほど、保護者や子どもたちから好評のようです。平成7年に園長に就任してからは、子どもの教育だけではなく職員育成にも力を入れてきた大橋さん。職員の育成では「褒める」ことを大切にし、職員を褒めるときは全員の前で褒めるようにしているそうです。来年3月で園長職を退く大橋さん。最後にこれからの垂見保育園について尋ねると、「子どもや保護者、職員みんなが来たいと思える園であってほしい」と願いを語ってくれました。

瑞宝単光章（消防功労）

37年間地域の安全守り続ける



元市消防団副団長
菊次 博さん
棚町、66歳

「受章は先輩の消防団員や周りの人のおかげ。長年消防団活動に取り組んできたことが認められたのでうれしい」と受章を喜ぶ菊次さん。37年間市消防団員として、地域の安全・安心を守ってきました。

昭和52年に先輩の消防団員に誘われて、三橋町の消防団に入団。長年の活動の中で、一番印象に残っているのは平成24年の九州北部豪雨だと言います。消防団副団長を務めていた菊次さんは、雨が止んだ後、河川から道路や住宅へ流れ込んだ泥土の処理や、浸水被害に遭った家財道具の搬出を指揮。特に困ったのが、泥土の処理。「道路も川も泥だらけ。なかなか作業が進まず、最終的に小学校のプールの水を使って洗い流しました」と、現場での機転を利かせた対応を語る菊次さん。また、毎週金曜日の安心安全パトロールや火災報知機設置を積極的に推進するなど、災害対応だけでなく、災害予防活動にも力を入れてきました。最後に、「災害が起きたときは、家族の理解や協力があつたからこそ迅速に出動できたと思います」と家族への感謝を口にしました。

瑞宝単光章（児童福祉功労）

豊かな経験で保育振興に貢献



元二ツ河保育園保育士
堤 律子さん
有明町、79歳

「榮譽ある章をいただき驚いています。これらひとえに、園長先生をはじめ、同僚の先生方に支えられ、その上、健康に恵まれ、みんなで頂いた褒美だと思っています」と受章を喜ぶ堤さん。41年間、保育の振興に貢献してきました。

昭和51年に保育士として両開保育園で勤務し、平成4年からは、二ツ河保育園に移り、28年間、保育士として熱心に子どもたちの保育や保護者の相談、後進の指導に当たってきました。「保育士は大切な子どもの命を預かる職業。子どもたちの安全や体調管理に常に気を配っていました」と話します。そんな中、園児が大きくなげがをする事態が発生。保護者にお詫びすると、「子どもははげががつきもの。心配しなくていいですよ」という言葉に救われたそうです。保育士の魅力は、大好きな子どもたちとのふれあい、そして子どもたちが喜んで登園する姿を見ることがあります。卒園した保護者や子どもたちとは今でも交流があるそうです。これからの日々を振り返ると、「今日の喜びを糧に元気に楽しい日々を送りたい。心から感謝しています」と話してくれました。